

The Result of Fourth Excavation of Haidukayama Ancient Tomb

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 秀人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/581

福島県喜多方市 灰塚山古墳第4次発掘調査報告

辻 秀人・佐々木拓哉・横田 竜巳・村木 翔
相川ひとみ・野呂 夕奈・阿部 悠大・泉澤 まい
笠原 大暉・鈴木 里奈・星 あゆみ

調 査 体 制

調 査 期 間	平成 26 年 8 月 5 日～8 月 26 日、9 月 8 日～9 月 11 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調 査 員	佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期 2 年） 木村圭佑・森千可子・岸 知広・芦野 悟・阿部大樹・佐々木雪乃・ 渋谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・新保摩実・西川悠也・廣瀬拓磨・ 結城彩花（4 年生） 村木 翔・相川ひとみ・野呂夕奈・阿部悠大・泉澤まい・笠原大暉・ 鈴木里奈・星あゆみ（3 年生）
調 査 参 加 者	梅宮崇成・漆館 遼・木村 智・柴田麻有・白銀沙也加・ 鈴木舞香（2 年生） 佐藤瑞希・菅原 月・清野寛仁・結城 智・富樫紗世・針生拓弥（1 年生）
調 査 協 力	喜多方市教育委員会、山中雄志・片岡 洋・植村泰徳（喜多方市教委） 佐藤勝男（新宮区区長）・後藤直人・田部文市・渡辺和男 近 輝夫・近ノリ子（敬称略）
土 地 所 有 者	新宮区



写真 1 灰塚山古墳後円部墳頂調査風景

例 言

- 1、本書は平成26年8月6日～8月26日、9月8日～11日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第4次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習Ⅰを履修する学生及び参加を希望した歴史学科1年生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書の掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。
- 7、灰塚山古墳第4次調査の実施にあたり、喜多方市教育委員会に協力いただいた。また、出土礫石経の赤外線写真撮影にあたり福島県立博物館および同館保存担当学芸員杉崎佐保恵氏にご協力いただいた。礫石経の墨書読解にあたり、福島県立博物館歴史担当学芸員阿部綾子氏、東北学院大学七海雅人教授にご指導いただいた。
- 8、灰塚山古墳に関わる既往の測量および調査報告は以下の通りである。灰塚山古墳第1次～第3次発掘調査成果についてはすでに報告しており、本報告では第4次調査成果について記載している。

灰塚山古墳関連報告書

福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』 福島県立博物館調査報告第16集

辻 秀人他 2012年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第1次発掘調査報告」

『東北学院大学論集 歴史と文化』 第48号

辻 秀人他 2013年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第2次発掘調査報告」

『東北学院大学論集 歴史と文化』 第49号

辻 秀人他 2014年 「福島県喜多方市灰塚山古墳第3次発掘調査報告」

『東北学院大学論集 歴史と文化』 第52号

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は、前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる有力な古墳群である。(辻 2006)。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され(福島県立博物館1987)、全長60mを超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群中で亀ヶ森古墳に次ぎ2番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。近年の調査により、喜多方市古屋敷遺跡が5世紀後半段間の豪族居館であることが判明し、灰塚山古墳も居館の主である首長の墓の候補として検討されることとなった。灰塚山古墳発掘調査は宇内青津古墳群の北端にある大型前方後円墳の様相を解明すること、さらには豪族居館である古屋敷遺跡戸の関係を解明することを目的に開始した。

これまでに実施した第1、2、3次調査では、前方部、くびれ部の墳丘構造がほぼ明らかになり、後円部墳頂にある方形の塚状遺構が礫石経塚であることが判明した。今回の第4次調査では、第3次調査で判明した礫石経塚の様相の解明および礫石経塚下層にあたる墳頂平坦面の精査と埋葬施設の様相把握をを目的とした調査を実施した。

調査は5年間継続する予定で今回は第4回目にあたる。今後は、埋葬施設の検出を目指して調査をすすめる予定である。

引用文献

- 福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集
辻 秀人 2006年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社

第1章 古墳の立地

第1節 古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に所在する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある。丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は会津盆地西縁を南北に走る断層が至近距離にあるため、層位が断層にむけて東側に傾斜している（註1）。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群中の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、白ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳、鎮守森古墳、雷神山1号墳、森北1号墳、虚空蔵森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は、宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵古墳などが考えられているが、築造時期を確定できず、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分によくその本来の姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存在したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見たときに、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

（村林 翔）

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。

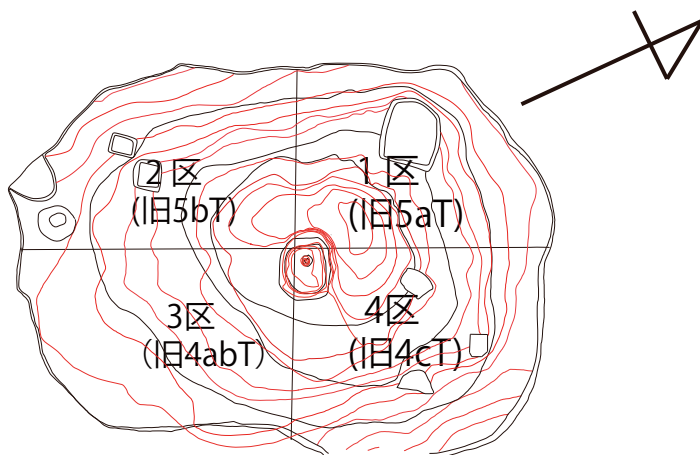


第1図 宇内青津古墳群分布図

第2章 発掘調査成果

今年度の調査は、昨年度に引き続き後円部墳頂で確認された塚状構造物の様相を解明するとともに、塚状構造物の下層にあたる墳頂平坦面を精査し、古墳の埋葬施設の構造を把握することを目的として実施した。調査を実施するにあたり、これまで墳頂には4トレンチ abc 区・5トレンチ ab を設けていたが、名称が煩雑となるため、墳頂調査区全体を4トレンチとし、北西部を1区、南西部を2区、南東部を3区、北東部を4区と呼称することとした。第1次から第3次調査までの報告で用いたトレンチ、区名称と新名称との関係は第2図に示す通りである。本報告及び以後は新名称を用いて説明する。

調査は後円部墳頂平坦面上に築かれた塚とその下層にあたる墳頂平坦面を対象とした。以下、それぞれについて記載したい。また、墳頂平坦面東端からは石塔の一部と見られる石材が発見され、古墳東側の丘陵裾に営まれた墓地に中世以降の石塔の一部が置かれていることを確認した。これについても説明を加えたい。



第2図 4トレンチ全体図

第1節 礫石経塚

前年度の調査において、塚状遺構が1辺8～9m、高さ60cm程度の方形の部分と方形部分の中央に乗る直径3m前後、高さ40cm程度の円丘部分で構成されていることが判明した。前年度調査では4トレンチ1区、3区部分を掘り下げたところ、塚状遺構の土層は上層は暗褐色シルト、中層は小礫、下層は褐色シルトであった。中層の小礫はきわめて多量で、中に墨書された礫が1%程度含まれていた。墨書の中には「南無阿弥陀仏」と判読できるものがあり、塚状遺構が礫石経塚であると考えられた。

今年度の調査では、4トレンチ2区、4区部分を掘り下げ塚状遺構を完掘した。礫石経塚の土層は前回調査時と変わらず、上層、下層ともにシルト、中層は多量の小礫であった。小礫はすべて河原石で、大きくともこぶし大程度、多くは楕円形で長軸10cm程度短軸5cm未満であった。3区で土坑が検出されている(写真5)。この土坑は礫石経塚の上部から掘り込まれており、後世の掘り込みと判断された。攪乱または盗掘坑の可能性はある。

前年度調査に引き続き、今年度の礫層掘下げに伴い、多数の墨書礫が出土した。取り上げ段階で墨書があると判断したもの総数200点程度であったが、確実に墨書があると認められた礫は第4図から第18図に示した155点である。文字の判読できなかつた資料も多いが、前年度に引き続き「南無阿弥陀仏」と読める資料があり、追善供養の意図があると考えられた。

(泉澤まい)



写真2 礫石経塚全体写真



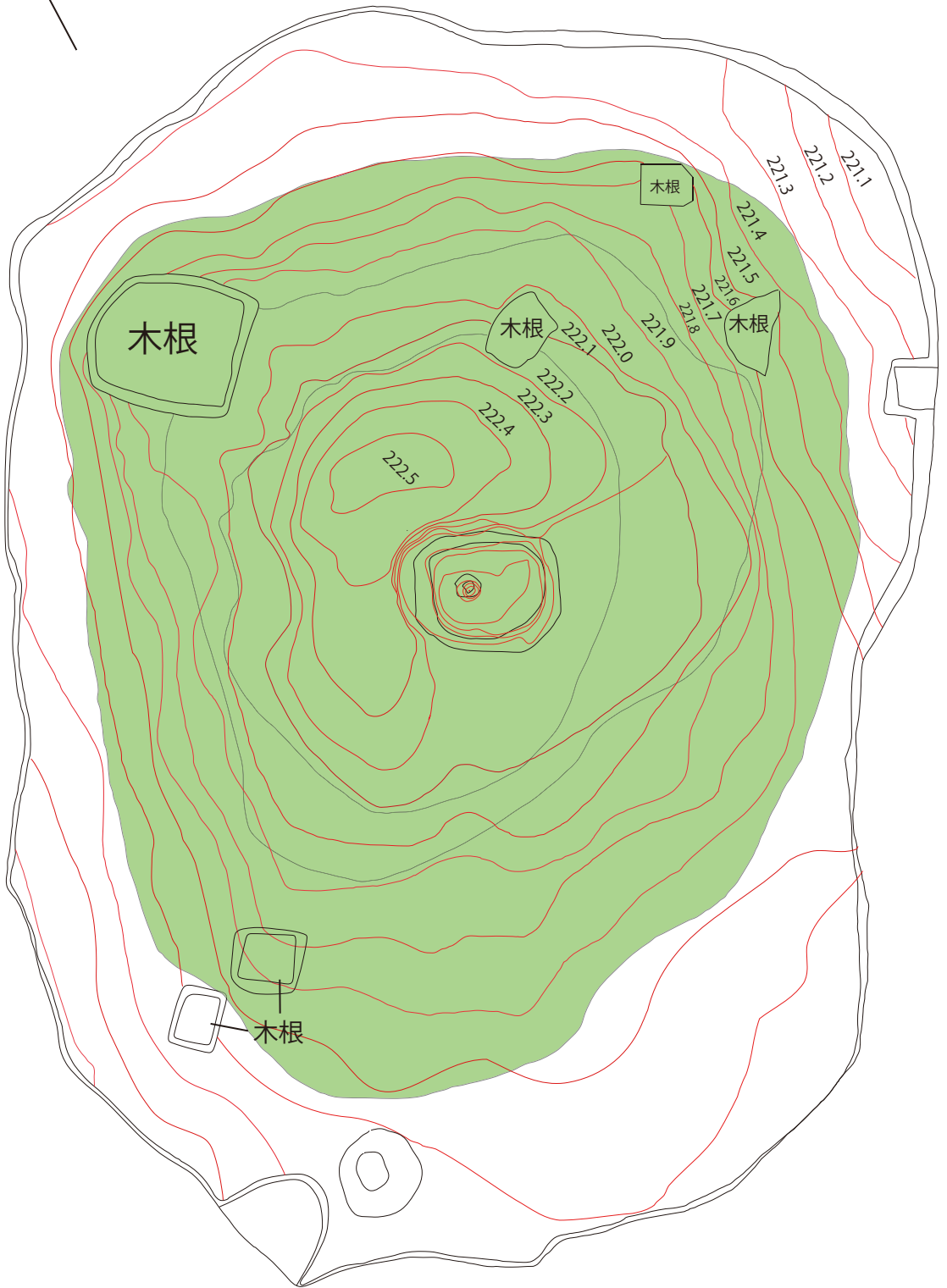
写真3 礫石経塚小礫層露出写真



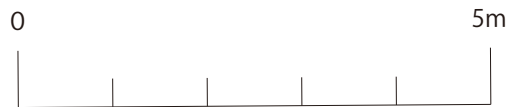
写真4 礫石経塚断面写真



写真5 土坑写真



第3図 礫石経塚全体図





No.1

南無
南無
阿弥陀
□
□



No.2

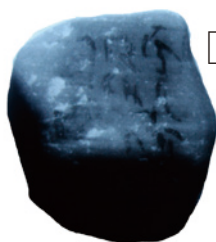
満海



No.3



No.4



No.5

□ 陀南
仏無
□ 阿
□ 弥



No.6



No.7



No.8



No.9

方



No.10

養養
養養



No.11

法



No.12



No.13-表



No.13-裏



No.14-表

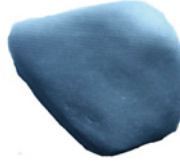
第4図 礫石経①



No.14- 裏



No.15- 表



No.15- 裏



No.16



No.17



No.18



No.19



No.20



No.21



No.22



No.23- 表

浄南
□無
□阿
□弥
□陀
□仏
用



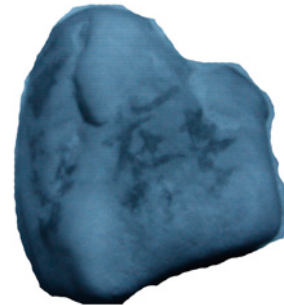
No.23- 側面①



No.23- 側面②



No.23- 裏



No.24

□
在 □ 在 □

第5図 礫石経②



No.24- 側面①



No.24- 側面②



No.25



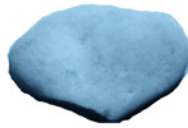
No.26



No.27



No.28



No.29- 表



No.29- 裏



No.30



No.31



No.32



No.33- 表



No.33- 裏



No.34

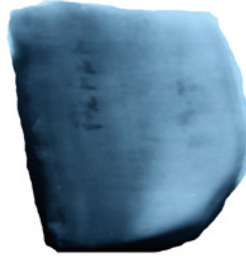


No.35

第6図 礫石経③



No.36



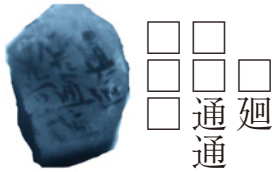
No.37



No.38



No.39-表



No.39-裏



No.40



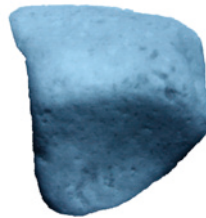
No.41



No.42



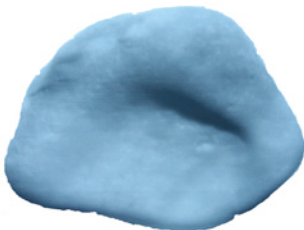
No.43



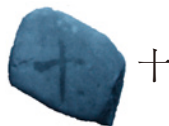
No.44



No.45



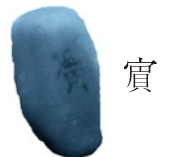
No.46



No.47



No.48-表



No.49-側面

第7図 礫石経④



No.50



No.51



No52

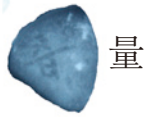


No.53

南無阿
□
□



No.54



No.55- 表



No.56- 表



No.56- 側面



No.57- 表



No.58- 表



No.59- 表



No.59- 側面裏



No.59- 裏



No.60



No.61

第8図 礫石経⑤



No.62



No.63



無
阿
弥
陀

No.64



有

No.65



若
濟

No.66- 表



No.66- 側面



No.67



No.68



No.69



果

No.70



出
出
出
出
出

No.71- 表



No.71- 側面



南
無
幽
出
出
南
無
阿
弥
陀
仏

No.71- 裏



No.72



陀南
仏無
南阿
無弥

No.73- 表



言
言
言

No.73- 側面①



No.73- 側面②

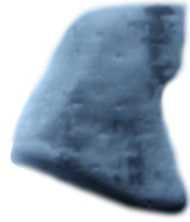


言 □
言 □

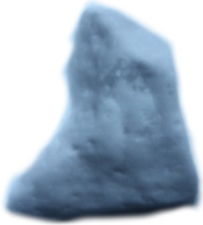
No.73- 側面③



No.74



No.75- 表

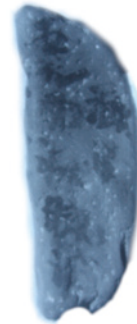


No.75- 裏



衆南
生無
一
切

No.76



減 □
南
無
阿
弥
陀
仏

No.77- 表



南
無
阿
弥
陀
仏

No.77- 側面



南南
無無
□
□

No.78- 上部



No.78- 下部

第10図 礫石経⑦



No.79- 側面①



No.79- 側面②



No.80

無釋



No.81



No.82- 表

言



No.82- 側面①



No.82- 側面②



No.82- 側面③



No.83- 表



No.83- 裏



No.84



No.85- 表

在真



No.85- 裏

南無阿弥陀仏



No.86



No.87

興个



No.88- 表

第11図 礫石経⑧



No.88- 側面



No.88- 裏



No.89



No.90



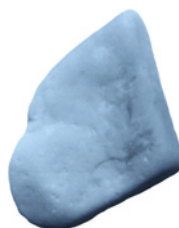
No.91- 表



No.91- 側面①



No.91- 側面②



No.92



No.93



No.94

南
無
南
無
南



No.95- 表

□
□
□
陀
仏
南
無
阿
弥



No.95- 側面



No.96- 表



No.96- 裏



No.97- 表



No.97- 側面



No.98- 表

□
□
南
無
阿
弥
陀
仏



No.98- 裏

第 12 図 礫石経 ⑨



NO.99- 表



No.99- 側面①



No.99- 側面②



No.99- 側面③



No.100- 表



No.100- 側面



No.101



No.102



No.103- 表



No.103- 側面



No.104- 表



No.104- 側面



No.105



No.106



No.107- 表



No.107- 側面



No.107- 裏

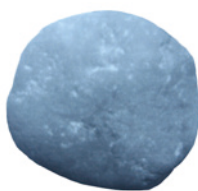


No.108

第13図 礫石経⑩



No.109



No.110



No.111



No.112



No.113

南無阿弥陀
□ □ 出

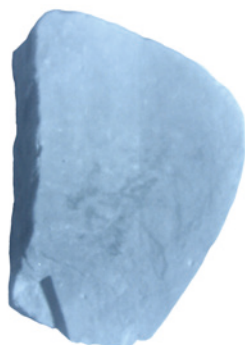


No.114- 表

南無阿弥陀
南無衣衣衣
衣衣衣



No.114- 裏



No.115



No.116



No.117

南無
南無阿弥



No.118



No.119- 表

南無阿弥陀
南無个个个



No.119- 側面



No.120

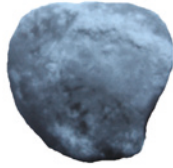


No.121

第 14 図 礫石經 ①



No.122-表



No.122-裏



No.123



No.124



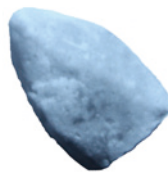
No.125



No.126-表



No.126-裏

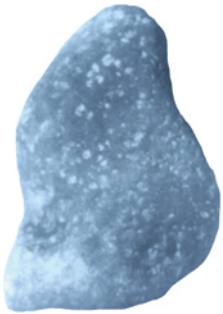


No.127-表



No.127-裏

南無



No.128



No.129-表



No.129-裏



No.130



No.131-表



No.131-側面



No.132

見

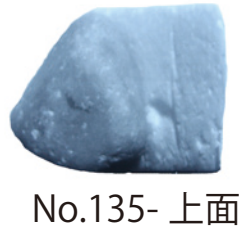


No.133-表



No.133-裏側側面

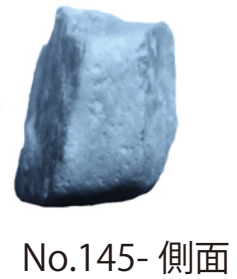
第15図 礫石経⑫



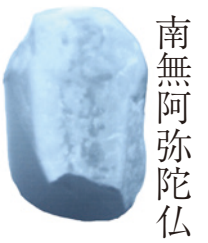
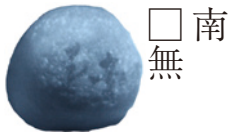
無
三
三
三
三
南
無
阿
弥
陀
仏



南
無
阿
弥
陀



第 16 図 礫石經 ⑬



第17図 礫石経⑭



No.155- 表



No.155- 側面

第18図 礫石経⑮

第2節 後円部墳頂平坦面の調査

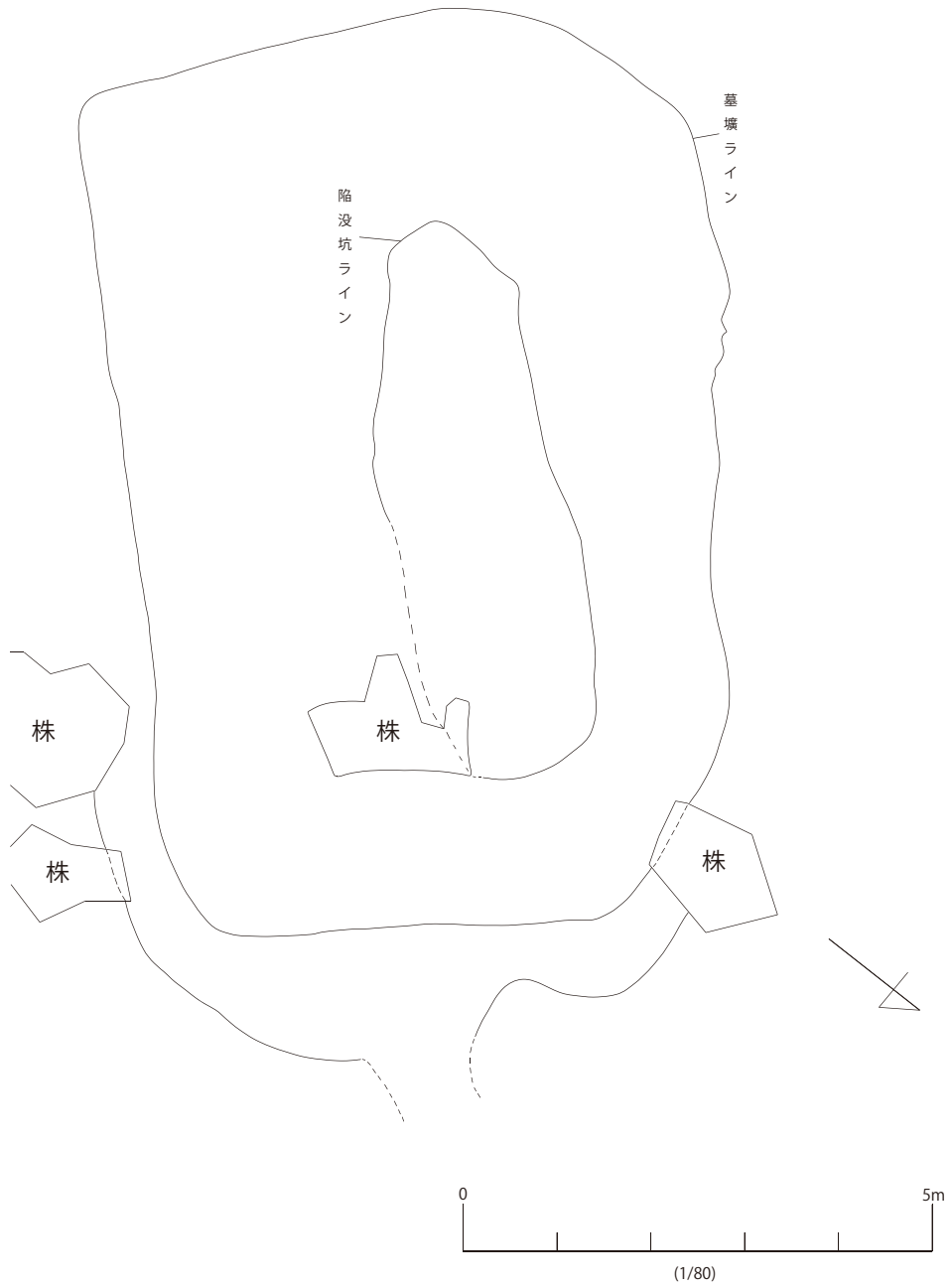
墳頂平坦面では、礫石経塚完掘後の墳頂平坦面の精査とサブトレンチによる一部掘り下げを実施した。

1. 墳頂平坦面の精査

前年度の調査で、1、3区墳頂平坦面の精査を実施し、1、3区ともに墳頂平坦面外周近くで、土色の違いを確認するとともに墳頂平坦面中央部分で南北方向に伸びる黒色土層を認識していた。

今年度は礫石経塚の完掘に伴い、墳頂平坦面全体を精査し、前年度調査で認識されていた土質の違いをおいかけた。

墳頂平坦面外周近くで観察されていた土質の違いは、南北9.8m、東西6.2mのやや不正な長方形の形に墳頂平坦面外周をめぐる事が判明した。1～4区のすべてで内側は小礫の混じった黄色い土層、外側はやや大きい小礫が混じった黄色い土層であった。一方、墳頂平坦面中央付近で発見されていた黒色土層は南北6m、東西2mの細長い形で一周することが確認できた。形状と規模から見て、前者は墓壙、後者は木棺腐朽に伴う陥没坑と判断された。なお、墓壙北側、前方部に連続する位置で土質の違いを認めたが、今回はその性格を明らかにすることはできなかった。墓壙に接続する墓道等の存在と関係する可能性があると思われた。



第19図 墳頂平坦面検出墓壇、陥没坑平坦面 ④図



写真6 墳頂平坦面墓壙、陥没坑検出状況（南から）

2. サブトレンチ設定と掘り下げ

墓壙と陥没坑の全体像を把握した後、トレンチ内の5ヶ所にサブトレンチを設定した。サブトレンチは1区の中央から北方向にⅠ、2区中央から西、北L字形にⅡ、2区の中央から西へⅢ、3区中央から南にⅣ、3区中央から東にⅤを設定した。

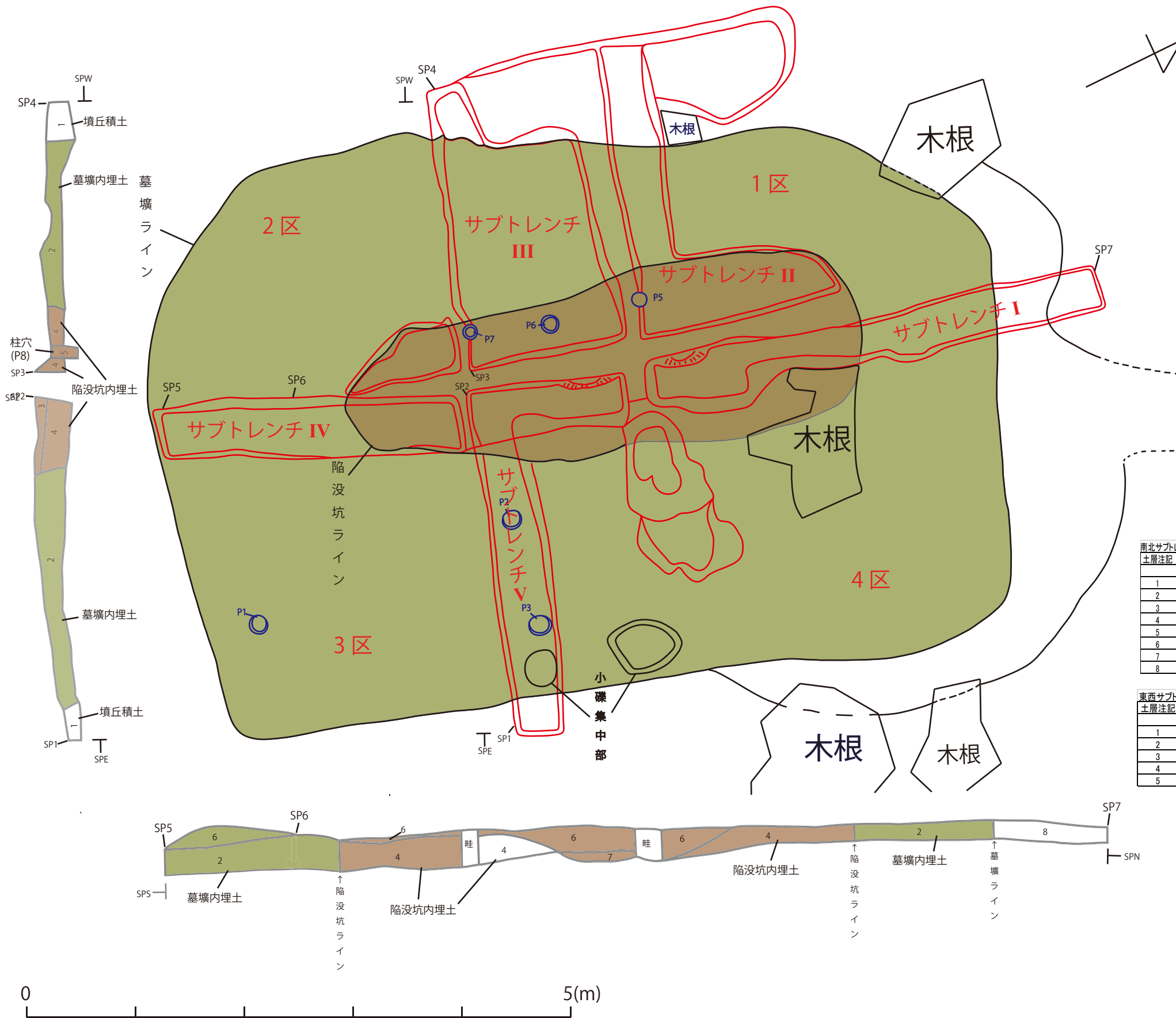
各サブトレンチを掘り下げた結果、第20図断面図が示すように、墓壙、及び陥没坑の埋土を確認することができた。その結果、墳頂平坦面の精査により理解された墓壙及び陥没坑の範囲が掘り下げによる土の認識と土層断面の検討でも追認された。

なお、サブトレンチⅡに1箇所、サブトレンチⅢに2カ所、サブトレンチⅤから等間隔に2カ所、墓壙南東済み近くで1カ所、計6カ所に杭穴が発見されている。どれも同様の大きさで、サブトレンチⅡ・Ⅲ内の杭穴は南北方向に、サブトレンチⅤの杭穴は東西方向にほぼ直線上に並んでいる。これらの杭穴は全体にL字形にならんでおり、杭列あるいは材木堀、簡易な建物構造物などの可能性が考えられる。層位的には礫石経塚の下層にあたり、江戸時代以前に位置づけられる。現状では陥没坑の埋土を切っていることから古墳築造後一定の時間を経て作られたものと見られるが、なお検討が必要である。

(星あゆみ、野呂夕奈、鈴木里奈)



写真7 サブトレンチ全体写真



南北サブトレンチ西壁断面図

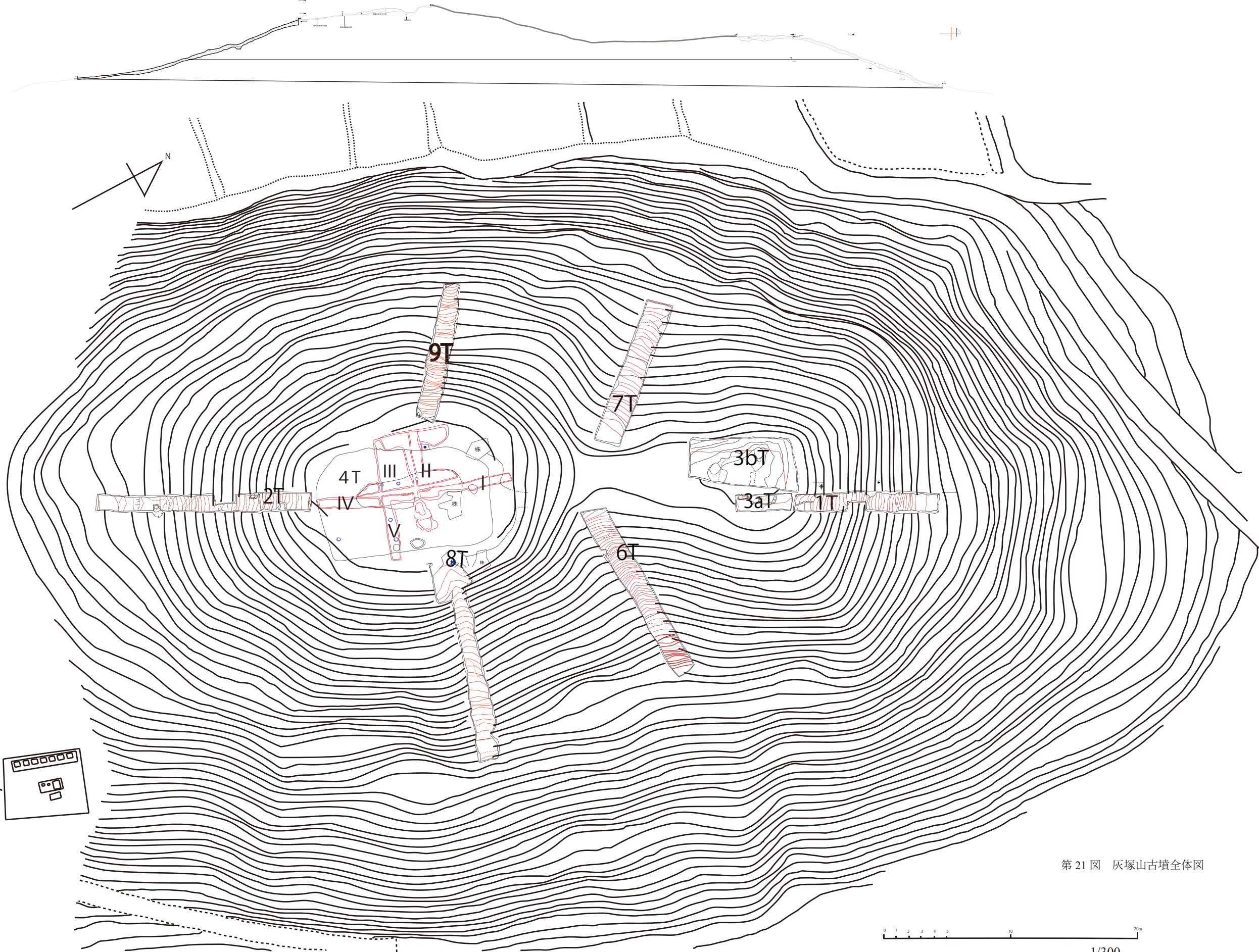
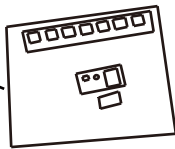
土層注記	層色	粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue 10YRにぶい黄褐5/4	中	弱	シルト	
2	Hue 10YRにぶい黄褐4/3	中	弱	シルト	墓壇内(3区東西サブトレンチ南壁断面図と同様)
3	Hue 10YRにぶい黄褐7/3	中	弱	シルト	陥没坑の最上部の土
4	Hue 10YR黄褐5/6	中	弱	シルト	陥没坑内(3区東西サブトレンチ南壁断面図と同様)
5	Hue 10YRにぶい黄褐5/3	中	弱	シルト	柱穴
6	Hue 10YR灰黄褐5/2	中	弱	シルト	
7	Hue 10YR褐灰4/1	中	弱	シルト	礎層
8	Hue 10YR明黄褐6/6	中	弱	シルト	粘土層

東西サブトレンチ南壁断面図

土層注記	層色	粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue 10YRにぶい黄褐5/4	中	弱	シルト	
2	Hue 10YRにぶい黄褐6/3	中	弱	シルト	墓壇内
3	Hue 10YRにぶい黄褐7/3	中	弱	シルト	陥没坑の最上部の土
4	Hue 10YR黄褐5/6	中	弱	シルト	陥没坑内、礎面積あたり1%の礫を含む
5	Hue 10YRにぶい黄褐5/3	中	弱	シルト	柱穴

第20図 第4トレンチ（旧第4トレンチ a, b, c 区、第5トレンチ a, b 区）平面、断面図

山口家墓所



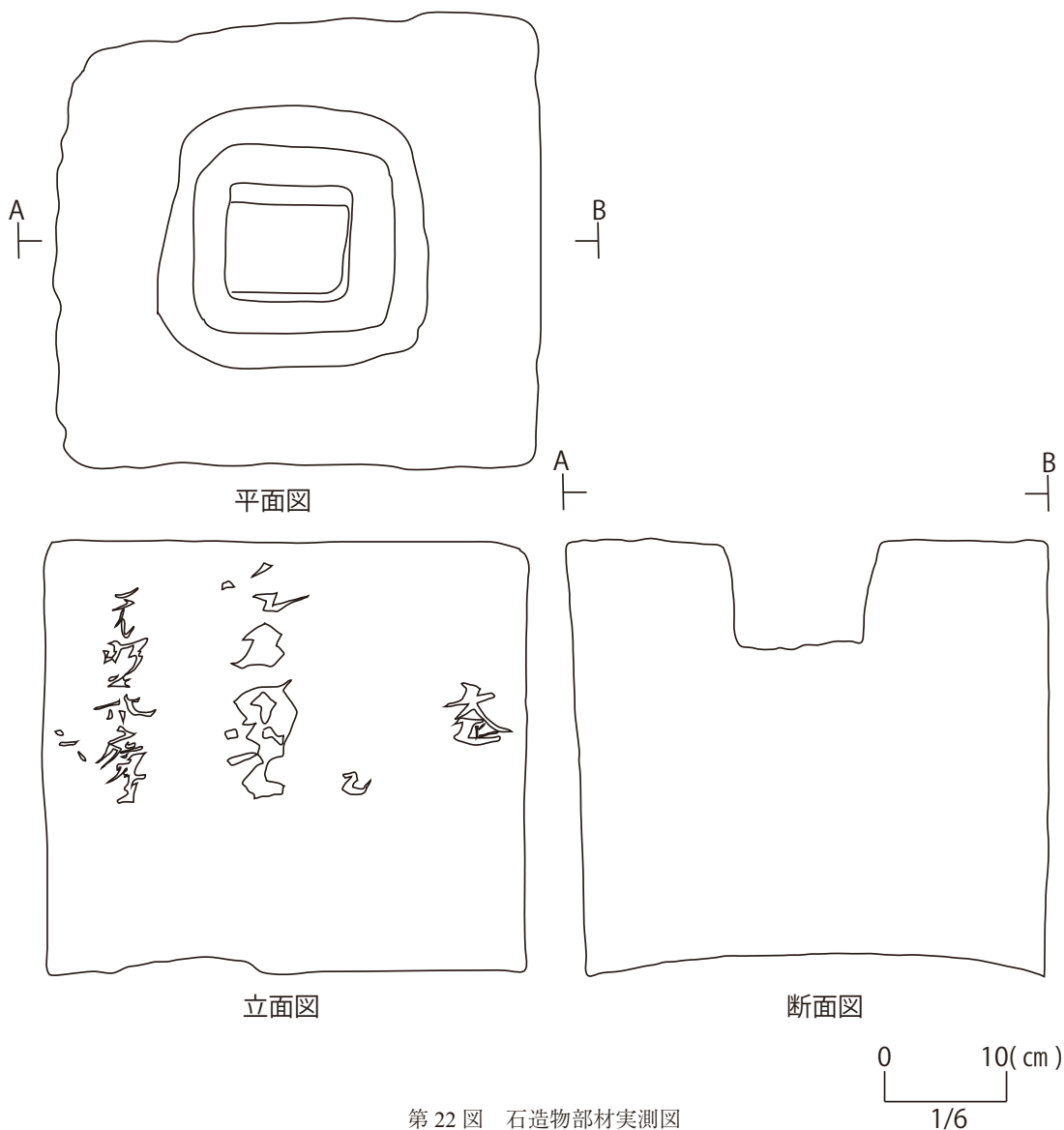
第 21 図 灰塚山古墳全体図

第3節 古墳周囲発見遺物

古墳調査期間中に中世または近世石造物の一部かと思われる遺物の存在を確認している。以下若干の説明を加えたい。

1. 墳丘上採集遺物

後円部墳頂平坦面東側から発見された石塔の一部かと思われる方形に加工された石が発見された(第22図)。縦40.0cm、横39.6cm、高さ36.4cmを測り、上面には円形の受け部が作り出されている。下面はややくぼむが特別な細工はない。4側面にはそれぞれ中央に墨書があるように見えるが現状では判読できない。キリークの墨書である可能性も否定できない。



第22図 石造物部材実測図

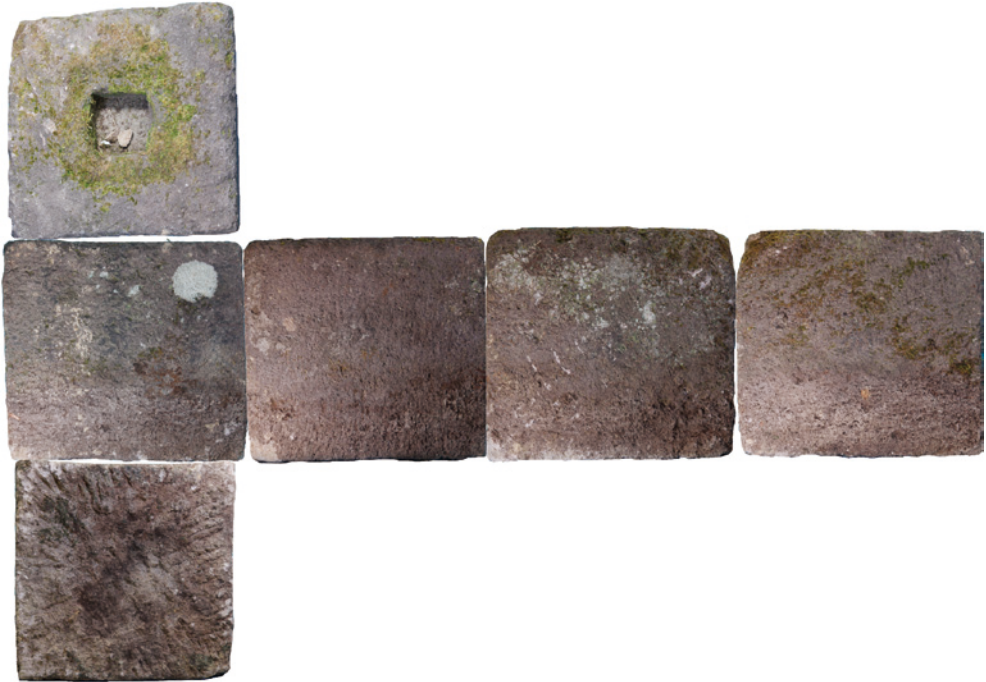


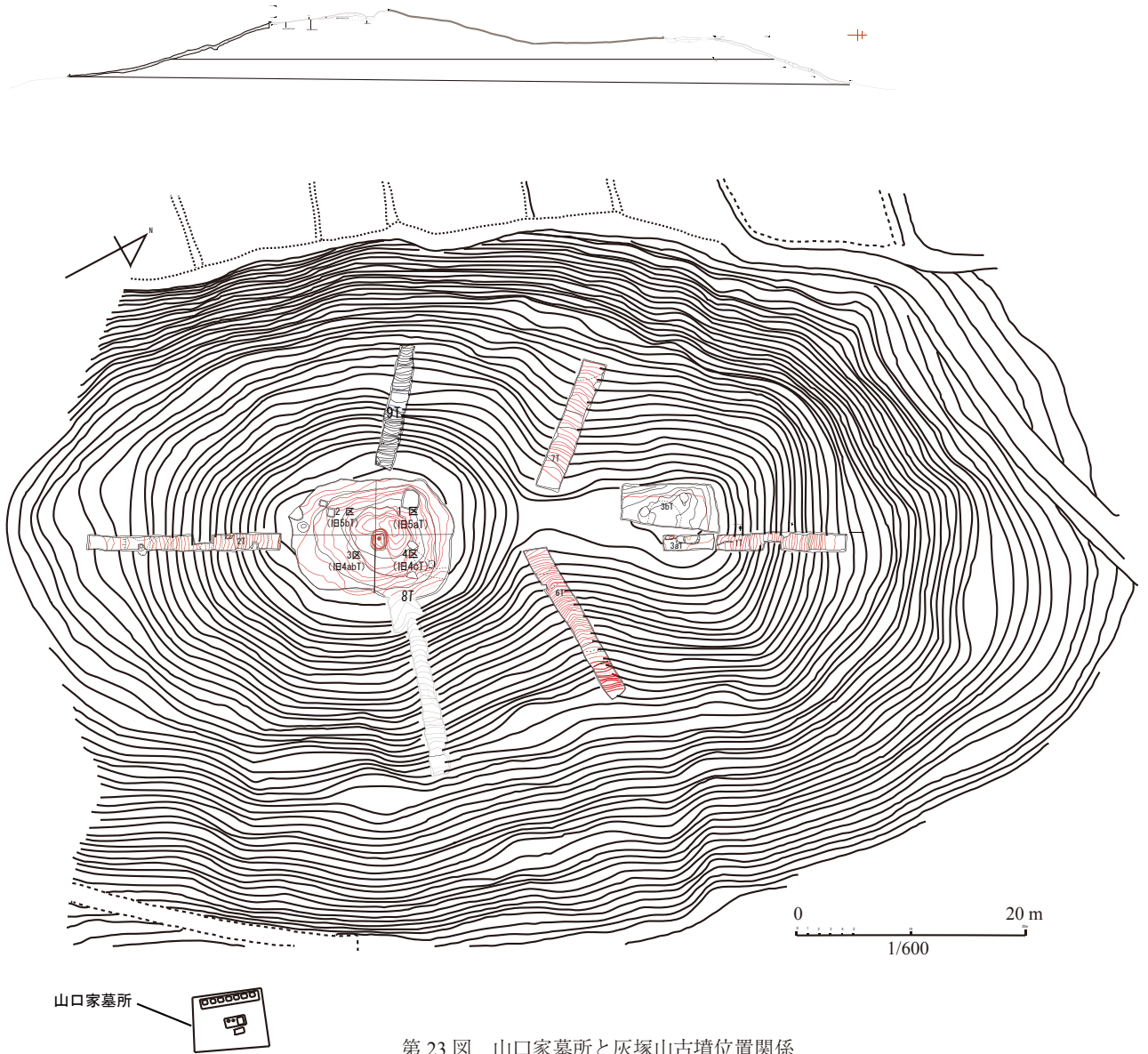
写真8 石造物部材写真
上、下、4側面

2. 山口家墓所で採集された遺物

山口孝信氏のご教示で確認できた遺物である。山口孝信氏のご教示によれば、写真11正面左側の角柱状の石材とその上の部材そして中央の円錐状の部材はいずれも地面に落ちた状態で発見されたとのことである。現状は3点とも手厚く保存されている。

写真左の2点、角柱状の部材は灯籠塔の石造物の部材の可能性が高く、その上に乗る方形の石材は宝篋印塔の一部である。写真中央の石材は宝珠を表したもので五輪塔などの石塔の頂部の部材と見られる。時期は中世から近世のいずれかに位置づけられるものだろう。

これら3点はいずれも墓所西側の丘陵から転落してきたものである可能性が高い。西側丘陵上には灰塚山古墳があり、墳丘状で発見された石材と合わせて、もともとは古墳墳丘近くまたは墳丘上にあった可能性も否定できない。灰塚山古墳の位置には新宮城に関わる墓所があったとの言い伝えもあり、関係する可能性もあるが、即断はできない。



第 23 図 山口家墓所と灰塚山古墳位置関係



写真9 宝篋印塔



写真10 宝珠



写真11 山口家墓所

第3章 まとめ

灰塚山古墳第4次調査の成果は、後円部墳頂平坦面に築かれた礫石経塚の全体像を理解できたこと、後円部墳頂平坦面の精査の結果墓壙と陥没坑を検出したこと、及び古墳周囲に中世または近世の石造物が分布していることが把握できたことなどである。

礫石経塚は、1返8～9mの方形塚の上に直径3m程度の円丘を乗せた形で、塚内部には膨大な河原石納められていた。河原石の中には1%弱の割合で墨書が認められた。墨書には1字だけの資料も多かったが、複数の文字が認められる場合も一定の割合であった。同じ文字が繰り返され、意味の分からない資料もあったが、意味の理解できるものとしては「南無阿弥陀仏」が最多だった。墨書の様相から見て教典を写したものというよりは供養の意図が強く感じられた。この地域周辺では、1611年の会津大地震によって山崎新湖が誕生し、最多で23もの集落が浸水したとされる。礫石経塚の年代はおおよそ江戸時代のものと考えられそれ以上の限定は難しい。従って礫石経塚の築造と会津大地震との年代的な関係は不明な点が多いが、礫石経塚の様相は、会津大地震及びその後の水害に関わる供養に関連する遺構である可能性を考えさせる。

灰塚山古墳墳頂平坦面の精査の結果、墓壙と陥没坑を確認できたことは大きな前進である。墓壙は墳頂平坦面ほぼいっぱい掘削されており、方向は古墳主軸に沿っている。また、陥没坑は墳頂平坦面ほぼ中央にあり、南北方向に細長く伸びている。古墳主軸と方向が一致している。このような様相から見て、現段階では灰塚山古墳の埋葬部は、掘りこみ墓壙に埋納された粘土槨または木棺直葬で、棺は割竹形木棺または舟形木棺が予想される。予想される埋葬施設からみて灰塚山古墳の築造時期は古墳時代前期または中期でも遅くない時期に絞られるだろう。来年度は以上のような想定のもと、埋葬施設の探索をする予定である。

古墳周囲の石造物の分布は今年度調査の新しい所見である。灰塚山古墳は国指定史跡新宮城跡と境を接している。新宮城から見てもっとも近い位置にある小高い場所にあたり、当然新宮城の時期に利用された可能性は十分に認められる。墓所であるという伝えが正しいか否かは今後の課題だろうが、灰塚山古墳の調査の過程で、新宮城との関連も視野におさめて検討を行う必要があると認識している。

謝 辞

灰塚山古墳第4次調査にあたり、調査を快諾いただきました新宮区の皆様、調査実施にあたりお世話いただきました佐藤勝男（新宮区区长）・後藤直人・田部文市・渡辺和男の皆様、喜多方市教育委員会及び同片岡洋氏、植村泰徳氏、宿舎を提供いただきました近輝夫、ノリ子様ご夫妻に心から感謝の意を表します。また、礫石経塚出土墨書礫の赤外線社

員撮影及び解説にあたり、福島県立博物館及び同館歴史分野担当学芸員阿部綾子氏、保存分野担当杉崎佐保恵氏、考古学分野担当藤原妃敏氏、田中敏氏にお世話をいただきました。また墨書礫解読に東北学院大学七海雅人教授の手を煩わせました。御礼を申し上げます。



写真 12 灰塚山古墳第4次調査風景